

マイ・フェア・ハニー

プロローグ

『兄』というものは、意地悪で横暴で身勝手で、理不尽なことこの上ない。
片倉律花は、兄とはそういうものだと思っていた。

その日、十四歳の律花は、制服のプリーツスカートが風でめくれ上がるのも気に留めず、全力で走っていた。

時折込み上げてくる涙を手の甲で拭いながら、それでもスピードを緩めず走り続ける。やがて自宅に着くと、玄関のドアを乱暴に開けた。靴を脱ぎ、鞆を投げ捨てるように玄関に置いて、そのままの勢いでリビングに駆け込む。

「お兄ちゃん、酷い！」

そして、ソファーに寝そべりながら漫画雑誌を読んでいた兄の正義に、険しい声を浴びせた。正義は切れ長の目を律花に向け、面倒くさそうに体を起こす。短く切り揃えられた髪の色は、律花と同じ黒だ。

「なんてことしてくれたのよ！先輩、私と別れるって言ってるのよ！」

「へええ。そりゃご愁傷様だな」

「他人事ひとごとみたいに言わないで。またお兄ちゃんが何かしたんでしょ！」

兄に恋路の邪魔をされたのはこれで何度目だろうかと考えながら、律花は正義に詰め寄った。

「今日学校に来てたんだよね？先輩とお兄ちゃんが校舎の裏で話してるの見たって、友達が言っていた。先輩に何言ったのよ！」

すると、正義はばつが悪そうに視線を泳がせた。だがすぐに、開き直ったように腕を組んで律花を見返す。

「……お前はまだ中二だろうが。彼氏を作るなんて、早いんだよ」

やっぱ先輩に何か言っただんだ！律花の頭にかあつと血が上る。

律花と正義は六歳離れた二人兄妹きょうだい。俺様気質な正義は、律花に対して威張ってばかりで、何でも勝手に決めてしまう。まさに唯我独尊わいがどくそん、傍若無人ぼわじやくぶじん。

そのうえ、ちよつと——いや、かなりのシスコンなのだ。普段は適当でズボラなくせに、律花に對しては異常なほどの心配性ぶりを発揮する。

そして今、正義が一番心配しているのは、律花の恋愛関係らしい。

中学生にもなれば、大抵の女の子は恋をしてみたいと思うようになるだろう。律花もそうだった。漫画やドラマの影響で恋に憧れ、夢見ているうちに、いつか自分も……と考えるようになった。

しかし、律花に好きな男の子ができて、付き合うことになると——必ず正義が邪魔をして別れさせるのだった。

「同級生のナギサちゃんには三年生の彼氏がいるのに、何で私には早いなのよ！」

律花が憤慨ふんがいして言うのと、正義はしれつとして言い返す。

「ウチはウチ、ヨソはヨソ。今のお前に彼氏は必要ない。いいか、お前くらいの年頃の男はな、頭の中がエロいことではいっぱいなんだ。そこにお前が求める愛なんて、微塵みじんもない。即やられてポイに決まってる」

「や、や、やるって……そんなこと考えてるのはお兄ちゃんくらいでしょ！」

律花は顔を真っ赤にしながら言い返した。その時、背後で誰かがぷつと噴き出す。振り返ると、リビングの入口に兄の友人、望月彰文もちづきあやむかみが立っていた。

二重瞼ふたえまぶたにすつと通った鼻筋。少したれた目元を優しく細めている。正義とは真逆の雰囲気のが、律花に優しく笑いかけた。

「彰文くん！」

正義との会話を聞かれたのが恥ずかしくて、律花は思わず怒ったような口調で彼の名を呼んだ。

「ああ、ごめん。おかしくて……つい」

彰文は正義の小学校の同級生で、中学から大学まで同じ。腐れ縁くさというやつで、今でも仲が良い。律花も昔から彼のことを知っていた。

家が近いせいか、彰文はしょっちゅう律花と正義の家に出入りしている。幼い頃よく一緒に遊んでくれた彰文は、律花にとつてもうひとりの兄のような存在だった。

「ねえ、彰文くんもお兄ちゃんに何か言っちゃってよ！」

律花がそう言うのと、彰文は気まずそうに答える。

「ああ、うん。ごめんね、一応止めたんだけど……」

「ばか言え。あいつの胸ぐら掴んだのは俺だけど、その後散々脅したのはコイツだぞ」

正義の言葉に、彰文は一瞬だけ顔色を変えた。

「ど、どういうことよ！ 二人して先輩に何したの!？」

「え、ああ、えっと……確かに少し話はしたけど、でもそれくらいで壊れちゃう関係は、本物じゃないんじゃないかな」

彰文が予想外の言葉を口にする。

「はあ？」

律花の怒りの矛先が変わったのを感じとったのか、正義は逃げるようにその場を去った。それを見送ると、彰文は小さく息を吐き、律花の目線に合わせて少し前かがみになる。光の加減で茶色く見える髪がさらりと揺れた。

「……いいかい、その先輩とりっちゃんは、縁の繋がりがなかったただけなんだ」

「……エニシ？」

意味がわからずじつと見つめ返すと、彰文は「ちよつと難しかったかな」と言つて笑つた。

「『運命の赤い糸』つて聞いたことあるだろう？ りっちゃんの小指には目に見えない糸が結んであつて、それがちゃんとどこかの誰かと繋がつてる。この世でたったひとりだけね。その人とならいくら正義が邪魔しても、決して縁が切れることはないんだ」

運命の赤い糸……確か、ちよつと前に見た映画に、そんな話が出てきた気がする。

「その人と出会えば、私も恋ができるつてこと？」

そう答えた律花に、彰文はにっこりと笑いかけて深く頷いた。

運命の人——いつか自分にもそんな人が現れる。そう思うと、律花は恋愛に対して前向きな気持ちになれた。

「……うん、わかつた。私、赤い糸で繋がつてる男の人を絶対に見つけるわ。ありがとう彰文くん、頑張るね！」

「そうか。俺も応援するよ」

よしよしと撫でてくれる彰文の手の温かさは、昔とちよつとも変つていない。ずっと一緒にいる、もうひとりの兄のような存在。

自己中で俺様な正義よりも、彰文のほうが優しくて頼り甲斐があつて、物知りで何でも教えてくれて——何度、彰文が本当の兄だったらいいのに、と思つたことか。

それから数年後。

彰文は、地元の大学を卒業すると同時に家を出てしまい、それきり会うことはなかった。

彼は今、どこでどうしているのだろう。

時々彰文のことを思い出しながらも、律花は運命の赤い糸で結ばれているはずの男の人を求め続けた。正義に邪魔をされても、決して諦めることなく、次の恋を探した。

「片倉さんって料理得意なんだって？ お昼に食べてるお弁当がすごく美味しそうだって噂聞いたよ」

「あ、やだ。そんなことないですよ。夕飯の残り物を詰めてるだけの手抜き弁当なんです。お料理が好きなので、いつも作りすぎちゃって……」

夜道を走る車の中。律花は膝の上に置いたシオルダーバッグの肩紐を弄りながら、控えめに答えた。茶色に染めたミディアムヘアの毛先を軽やかに揺らし、運転中の彼をちらりと覗き見る。

「いいなあ、料理好きの子って。家庭的で素敵だよね」

「えっ、そ、そうですか？」

「うん、かわいくて料理もできるなんて最高だよ。俺の好みのタイプ」

予想外の褒め言葉に律花は舞い上がった。もしかして、ついに今夜、彼氏ができるのでは――

緩みそうになる口元を引き締めながら、律花はちらりと横を盗み見る。ハンドルを握るのは、同じ会社の営業部の桜井だ。彼は、先月、関西支社から東京本社勤務になった。

律花より四歳年上の二十七歳で、なかなかのイケメン。華奢で少し頼りない雰囲気があるものの、勤務態度は真面目で、お酒も飲まない。

趣味はドライブと海外旅行。ちなみにこれは、ついさつき得た情報だ。運転している車は左ハンドルの高級車だから、もしかしたら家はお金持ちなのかもしれない。

経理部所属の律花と営業部の桜井は、もともと接点がなかったのだが、今日の飲み会で初めて話してすぐに意気投合した。そして彼は、二次会不参加の律花を家まで送ると申し出てくれたのだ。道順を説明していると、車が道を逸れる。律花が違うと指摘すると、桜井はにっこり笑って「遠回りしよう」と言った。

これは仲良くなるチャンスなのかもしれない。律花は、窓の外の景色を見るふりをして、こっそりと携帯電話の電源を落とした。絶対に、誰にも邪魔をされたくないから。

「得意な料理ってある？」

桜井からの急な質問にはっとして顔を上げ、律花は最初に思い浮かんだ料理名を答えた。

「オムライスでしょうか。ただ、和食でも洋食でも何でも作れますよ」

「あ、じゃあロールキャベツは作れる？ 昔よく食べたんだけど。もしよかったら今度作ってほしいな」

「もちろんです！ あ、でもどうやって会社に持っていきうのかな……」

首を傾げて考えていると、桜井がくすりと笑う。

「会社じゃなくて僕の家に来て作るっていうのはどう？」

「桜井さんの家、ですか？ ……ええっ」

その意味を理解し、桜井の横顔をまじまじと見つめる。冗談を言っているようには見えない。

「もちろん無理には言わないけど」

「いえ、私でよければ作りに行きます！ 行かせてください！」

力強く言うと、彼はちらりと律花を見て笑った。

車は間もなく律花の住むマンションに到着しようとしている。

律花が住んでいるのは、十五階建ての白壁のマンション。最寄り駅から徒歩五分だ。ファミリー向けで、敷地内にある広場には遊具もあり、休日は子供たちの楽しそうな声が響く。

表の扉はオートロックで、入口や駐車場には防犯カメラ付き。もちろん管理人も常駐しているの
で、よっぽどのことがない限り犯罪には巻き込まれない——らしい。

就職が決まって上京した一年半前から、律花はこのマンションに住んでいた。立地が良いので家賃も高いのだが、ここを選んだのも、家賃を支払っているのも、実は律花ではない。

桜井はマンションのエントランスに車を止めると、きよるきよると辺りを見回した。何か珍しい物でもあるのだろうかと思議に思いつつ、律花は居住まいを正す。

「わざわざ送ってくださって、ありがとうございます」

「これくらいいけないさ」

まだ別れたくなくて、律花はゆっくりとした動作でシートベルトを外しながら、それとなく会話を引き延ばす。

「でも、家は逆方向なんですよね？ 何だか申し訳なくて。今度、お礼させてくださいね」

バッグを肩にかけ直して顔を上げる。すると、桜井もシートベルトを外して、律花のほうに顔を向けた。

「じゃあさ、今お礼くれる？」

「今ですか？ でも私、何も持ってないんですけど……」

「そうじゃなくてさ」

桜井は助手席のシートに手を添えて、ぐいと身を乗り出した。

間近で見つめられ、トクン、と心臓が跳ねる。ふわりと手が頬に触れ、次第に桜井の顔が近づいてきた。

まさか、これは……キス？

意識してしまうとどうしていいのかわからない。黙って彼を見返しながら、内心慌てていた。

桜井が目を閉じたのを見て、律花もぎゅつと目を閉じ息を止める。

コンコン、と窓ガラスを叩く音が聞こえたのは、その時だった。

固く閉じた目をゆっくり開くと、運転席の外に誰かが立っているのが見えた。車高が低いせい
で顔は見えないが、男だということはわかる。その男はイライラしたようにもう一度窓を叩いた。今
度は少し力が強い。

いいところだったのに邪魔が入ってしまった。がっかりしつつもどこかほっとしたような複雑な
心境で、律花は窓から男のほうを見た。マンションからの明かりで、男が黒いシャツに黒のスウ

エツトパンツという格好であることがわかる。

「……え？」

ふと、その服装に既視感を覚え、律花は男の顔を確認しようと頭を下げた。

「すみません、車、邪魔でしたか？ 今、移動しますので——」

桜井が詫びながら窓を開ける。その時、律花は男の正体に気づいた。

「待って！ 開けちゃダメ！」

しかし遅かった。律花の制止は間に合わず、桜井が窓を全開にしてしまう。

「お前、何やってんだ!？」

窓の外から聞こえてきた聞き覚えのある怒鳴り声に、律花は戦慄を覚えた。

同時に男の腕が伸びてきて、桜井の胸ぐらをシャツごと掴み、引く。

「うわっ、な、何ですか急に!？」

「だから俺の律花に何やってんだって聞いてんだよ!？」

「俺の？ え……」

胸ぐらを掴まれながら、桜井は首だけで律花を振り返った。

「ち、違うんです！ この人は——もう、お兄ちゃん暴力はやめてよ！ 手離して!？」

そう、そこに立っていたのは、律花の兄、正義だった。

短い髪をツンツンに逆立たせ、顔はまるで般若の面を付けたように恐ろしげだ。桜井を睨みつけながら、ネクタイごと彼の首を絞めつけている。

転がるように外に出た律花は、正義の腕を引っ張って桜井から引き離そうとした。そのはずみで

桜井の体がドアに押しつけられ、「ぐえっ」と声が漏れる。

「わあ、ごめんなさい桜井さん!？」

律花の姿を確認して安堵したのか、正義の手からやっと力が抜けた。

「無事か、律花?？」

「無事かって、ただ車で送ってもらっただけよ！ なのに誘拐されたみたいに言わないで!？」

「帰りが遅いから心配してたんだぞ」

「まだ十時じゃない!？」

二人の言い合いを、桜井は啞然とした様子で聞いていた。

「……えっと、お兄さん？ 片倉さんの?？」

律花と正義を交互に見比べ、掠れた声で呟く桜井に、律花は申し訳なく思いながら言う。

「はい、あの……ごめんなさい。これ、兄なんです。ちよっと心配性で……」

「そ、そうなんだ」

桜井は呆気にとられたようだったが、車から降りて外へ出た。引っ張られてくしゃくしゃになったネクタイとシャツを直すと、礼儀正しく直立し、右手を差し出す。

「あ、あの、初めまして——」

「うちの大事な妹をこんな時間まで引っ張り回して、その第一声がハジメマシテ、だあ?？」

正義は車の天井をガンと拳で叩き、怒りを爆発させた。

「やだ、何やってんの！」

桜井の車は高級車だ。ひやひやしながら律花は正義の腕を引いたが、びくともしない。

「しかも落ち着きなく辺りを見回してたな。何を企んでやがった？」

「べ、別に企んでなんて——」

正義の様子にたじろいた桜井が一步後退すると、正義はすぐに間合いを詰めた。身長百八センチの大柄な体躯に気圧されて、桜井の顔から少しずつ血の気が引いていく。

「じゃあ、律花に顔を近づけて何をしようとしてたんだ？ 人目がないのをいいことに、俺の律花を手籠めにしようとしてたんじゃねえのか？ ああ!?」

「もう！ 桜井さんはここまで送ってくれただけだつてば！」

「帰るつてメールから、もう一時間だぞ？ お前のいた飲み屋からここまでなら車で三十分とかかからない。それを倍の時間かけて——下心があったんだろうが！ 違つかコラ！」

言いながら、正義が拳を振り上げる。

「……や、えっと、ありましたすみません！ もうしませんから、許してっ！」

桜井は首を竦ませ、両腕で顔を覆う。

「だったらとつと俺の前から消えろ、クズ！」

その言葉を聞き、桜井は脱兎のごとく車に飛び乗った。

「あ、桜井さん、送ってくれて——」

桜井はそのままアクセルを踏み込んだ。地面とタイヤのこすれる嫌な音が周囲に響く。

ありがとう、と続いた律花の声はその音に掻き消されてしまった。桜井の耳には届かなかっただろう。

「嘘でしょ……そんなあ……」

終わった。まだ何も始まっていなかったけれど……

小さくなっていくテールライトを見つめながら、律花はがっくりと肩を落とした。

正義にデートの邪魔をされたのは、これで二十九回目だ。

昔から心配性だった兄は、飽きもせず律花のデートをことごとく邪魔し続けていた。それは律花が成人しても変わらない。

兄の心配性は病的なほどで、律花が就職を機に実家を出てひとり暮らしをしようすると、都会は危険だらけだと両親に訴え、自分と一緒に暮らすべきだと主張した。

そして都内の大手通信会社で営業マンとして働いていた兄は、ひとり暮らしをしていたワンルームマンションをさっさと解約したかと思えば、勝手にこのマンションを契約したのだ。

結局、律花は強制的に兄と同居させられることになってしまった。

それからというもの、正義は何かにつけて律花の生活に首をつっこんでくる。

休日にショッピングへ出かけようとすればナンパを未然に防ぐためと言ってついてくるし、遅くまで残業していると、わざわざ会社まで迎えに来たりする。けれどこれはまだマシなほう。

飲み会があれば一時間おきに電話がかかってくるし、内緒で合コンに参加した時なんて、その場

に乱入した正義に連れ戻された。

心配してくれるのは嬉しいのだけれども、行き過ぎた行動がかなり目立つ。

昔はこんなじゃなかった気がするんだけどな……

ふと思いつくのは、虫取り網を持って駆ける正義のうしろ姿。律花は遊びに行く正義の後をいつも追っていた。ずいぶん昔の記憶だけれども、あれはいくつの頃だっただろうか。

いつの間にか、律花が追いかけてなくても、正義は常に近くにいるようになった。まどわりついて離れず、ウザいことこの上ない。

「はあ……」

しばらく夜の闇を呆然と見つめていた律花は、ため息を吐いた。

「つたく何だあの男は!? 律花、お前いつから付き合ってる?」

「まだ付き合ってたわよ! セツかかわいい雰囲気だったのに、邪魔したのは誰!」

「ああ、そうか……それは残念だったな」

見るからにほっとしている正義に、律花はイライラを募らせる。

「お兄ちゃんのばか!」

歩調も荒くマンシヨンの入口に向かう律花の後を、正義が大股でついてきた。

「あの男はやめたほうがいい。若造のくせに高級車を乗り回す奴にロクな奴はいない。どうせ親に買ってもらった車だろう。俺みたく自分で買えっつーの。あんなのと結婚したら苦労するのは律花だぞ。マザコンのひとり息子なんか、嫁姑問題に発展したらどうする? アイツは嫁を放って姑

の味方に付くぞ」

「桜井さんがひとり息子かどうかもわからないでしょ!」

律花はエレベーターのボタンを叩くように押して、正義を振り返った。

「すつごく優しくて、大人で、とってもいい人だったんだから!」

「フン、アイツは見た目からしてマザコンのひとり息子だよ。いいか律花、お前に見合ういい男は他にいる! 自分を安売りするな」

「またそれ? お兄ちゃんが認めるいい男なんて、世界中のどこを探したって見つかりっこないから!」

いつも、そう。この超絶ウザ兄・正義は、毎度毎度、律花の男友達や恋人候補を値踏みしては、脅して追い払ってしまうのだ。

デートの邪魔は彼の十八番。なぜか鼻が利くらしく、律花に好きな人ができて、デートでいい雰囲気になった途端にひよっこり現れる。

正義に邪魔をされ続けたせいで、今まで一週間以上続いた彼氏はいない。当然キスも、その先の経験だってない。兄の存在は、いつか運命の人に巡り会うための試練なのだと同様に考えるようにしていたけれど、その試練を一度も乗り越えたことがなかった。

エレベーターが到着し、二人は乗り込む。律花は、またも叩くように五階のボタンを押した。

律花が正義をじっと睨んでいると、彼は先程とは打って変わり、穏やかな口調で諭すように話し始めた。

「いいか律花。いつかきつと、お前のためなら全てを捨ててもいいという男が現れるから——」
「いつかっつていつよ！ っっていうか、そのチャンスを全てダメにしてるの、お兄ちゃんじゃない！」
恋愛に憧れる純粋な想いは、いつしか兄への対抗心にとつて変わり、もう何が何でも彼氏を作つてやるという心境になりつつあった。

「いい加減、妹離れしてよ！ 私、もう二十三歳なんだよ！」

「何言ってるんだ、まだ二十三歳じゃないか。心配して何が悪い。都会は危険でいっぱいなんだぞ。」

危険なのは正義の思考回路だ。

エレベーターが五階に止まると、律花は扉が完全に開く前に降りた。その後を正義が追う。

「それより、携帯はどうした？ 何度も電話をかけてるのにずっと留守電じゃないか。帰るつてメールがあつたきり音信不通で……お兄ちゃん、律花のことが心配で心配で、マンションの外で待つてたんだからな」

電源切つてたんだつてば！

律花が無言で携帯電話の電源を入れると、着信通知が十数件も届いていた。それらは全て正義からのもの。最後のほうは三分おきになっている。ほんの一時間電源を切つただけで、これだ。

律花はまた、はあ、と盛大なため息を吐いた。

「お風呂、先に入るからね」

玄関の扉を開けて。パンプスを脱ぎ捨て、振り返らずに言う。

リビングに入ると、電気とテレビが付けっぱなしになっており、夜のニュースが静かに流れている。2LDKのフロアには、十五畳のリビングと、使い勝手のいい対面式のキッチンがある。食事用のテーブルセットは椅子が四脚。テレビを囲むように設置してあるカウチソファもガラス製のローテーブルも、全て正義が用意したものだった。

「……律花、その前に大事な話があるんだ」

自室のドアを開けて電気をつけた時、正義が静かな声で切り出した。

「話つて何よ!？」

語尾も荒く振り返ると、正義は眉間に皺しわを寄せ深刻な表情で俯うつむいた。こんな兄は今まで見たことがない。

「……お兄ちゃん?」

悪い話なのだろうか。ごくりと唾を呑み、正義の顔をじっと見上げて続きを待つ。

数秒ののち、正義は決心したように顔を上げた。

「……実はな、お兄ちゃん……来月からアメリカに転勤になったんだ」

「えっ、アメリカ? 転勤?」

つてことは、日本からいなくなるつてこと?

深刻な顔をしている正義をまじまじと見つめながら、律花はその言葉を頭の中で何度も反芻はんろうした。

転勤の話聞いてからの一ヶ月は、あつという間に過ぎていった。そしてとうとう明日、正義は

遠い異国の地へと旅立つ。律花はこの日を指折り数えて待ち続けていた。

「早く明日になんないかなあ」

リビングの隅に用意してあるスーツケースを眺めながら、律花は紅茶を飲み干した。

土曜日の午前十時。いつもなら惰眠を貪っているはずの時間に目が覚めてしまった律花は、日課の掃除や洗濯を終わらせ、ホームベーカーリーからパンが焼き上がるのを待っていた。

ソファアに足を投げ出し、ファッション雑誌をバラバラとめくっていると、背後で扉の開く音が聞こえる。

「あら、おはようお兄ちゃん！」

振り返ると、正義はトランクス一枚という姿だった。眠そうな顔でフラフラと歩き、冷蔵庫から二リットルのお茶のペットボトルを出してそのまま口を付ける。

いつもの律花であれば、シャツを着てと叫び、コップを使えと怒るのだけど、今日だけは大目に見てあげることにした。

だって、この光景も今日で見納めなのだから。

「もうすぐパンが焼けるけど食べる？ それともコーヒー淹れようか」

愛想よく尋ねたちょうどその時、パンが焼き上がったことを知らせるアラームが鳴った。ソファアから立ち上がり、両手にミトンを付けてパンを取り出す律花を見て、正義は重たい息を吐く。

「律花、お兄ちゃんは明日アメリカに行くっていうのに……寂しくないのか？」

「えー寂しいよ？ 夕飯もひとりだし、家に帰ってきて誰もいないんだもん。すっごく寂しいー」

そう言いつつも、どうしても顔はにやけてしまう。明日から律花はひとり暮らしになる。自由を満喫できるのだ。

「そんなことより、荷物の準備は大丈夫なの？ 空港までの電車の時間はちゃんと調べた？」

「ん、ああ、問題ない。お前も来るだろ？」

空港まで見送るのは当然だと言いたげな正義を見て、律花は眉間に皺を寄せた。

……まあ、それくらいいいいか。

そんなことを考えていると、正義が突然ベランダに出て階下を見下ろした。外の騒音が耳に入る。どうやらトラックから荷物を降ろしているところらしく、大声で指示している声が聞こえた。

「そうそう、朝からやけに騒がしいと思ったら、隣に誰か越してきたみたい。ずっと空き部屋だったよね」

「……やっと来たか」

正義はぼつりと咳くと、部屋に戻りTシャツとジーンズに着替えて出てきた。その時、インターホンが鳴った。

対応を正義に任せ、律花は焼き上がったパンに慎重にナイフを入れた。

「やっぱりレシピよりもイーストを多めに入れるといいのかな」

パンの出来に満足しながら焼きたてを頬張ってみる。中は熱々なうえに、しっとりしていて美味しい。見た目も味も最高だ。

今度はクロワッサンでも作ってみようかしら、と思索していると、やっと正義がリビングに戻っ

てきた。しかも、誰かを連れて。

正義と並んで立っている長身の男性は、律花に気づいてにっこり笑みを浮かべた。

「こんにちは」

「え、あ、どうもこんにちは……」

つられて挨拶を返しながら、彼をまじまじと見返す。

焦げ茶色のさらさらの髪。二重瞼ふたえまかたに少し目じりの下がった目元。そして優しいような笑顔。

その瞬間、昔の記憶がよみがえってくる。

「え、彰文くん？ 嘘、本当に？」

ばたばたと駆け寄り、間近で見つめる。

「……わあ、本当に彰文くんだ！ すっごく久し振りだね！」

「そうだね。でも俺はあんまり久し振りって感じがしないな。正義と会う度に色々話を聞いてた

からかな」

「はあ？ 話って……どういうことお兄ちゃん！」

ギョリと睨むと、正義は肩を竦めた。

「彰文と飲んだ時に、ちよつと世間話しただけだよ」

「ちよつと……？」

まったく、何を言われてるかわかったもんじゃない。

「仕事は頑張ってる？ こっちの満員電車は大変でしょ？」

彰文は律花を満面の笑みで見つめながら言った。

「そうね。でも、まずは朝、遅刻しないようにちゃんと起きることが試練かな」

「そうか、りっちゃんは朝が苦手だったね」

彰文は、小さい頃からずっと律花のことを「りっちゃん」と呼ぶ。懐かしさに思わず頬が緩んだ。近くでよく見ると、彼は最後に会った時よりも髪が短くなっていた。それに、こんなに背が高かったのだろうか。こんなに肩幅が広がったのだろうか。言葉にはできないけれど、どこか違和感を覚えてしまう。

何が違うのだろうかとうと彰文をじつと見つめ、ようやく気づく。

「そっか……彰文くん、大人になったねえ」

律花の記憶の中の彰文は、大学を卒業したての、今の律花と同じくらいの歳の青年だった。しかし、七年も経てば当然変わっている。

「何それ、親戚のおばちゃんみたいなこと急に言わないでよ」

彰文がくすくすと笑い出す。

暖かい春の日差しのような、夏の朝のさわやかな風のような、そんな優しい笑顔だけは変わってなかった。

それが無性に嬉しくて、律花も一緒になって笑った。

「それで彰文くん、今日はどうしたの？」

彼は正義と同じジーンズにTシャツというラフな服装で、なぜか肩にスポーツタオルをかけ、軍

手まで持っていた。まるで引っ越し業者みたいだ。

「あ、もしかして隣に引っ越ししてくる人の手伝い？ 彰文くん、引っ越し屋さんになったの？」

「違うよ。仕事はずっとプログラマーだよ」

昔からパソコンが得意だった彰文は、それを活かしてソフトウェア開発の仕事をしている。

「じゃあ、どうしてそんな格好してるの？」

律花が首を傾げると、横からパンを摘まみつつ正義が口を挟んできた。

「彰文が隣に越して来たんだよ」

「え、そうなの？」

でも、どうして？

「ほら律花も手伝え。家具は重いから運ばなくていいけど、段ボールから荷物を出すくらいはできるだろ？ あと昼食の用意も頼むぞ。夜は焼肉店に連れてってやるから、それまでちゃっちゃんと働けよ」

正義が偉そうに命令する。

「はあ？ ちよっと待ってよ！」

外に出ようとする正義の背中に向かって叫ぶ。律花は嫌な予感がした。

「な、何で……」

混乱する律花に、彰文が言った。

「ごめんね、本当はもつと早く来る予定だったんだけど、仕事が立て込んで」

「おら、早くしねーと日が暮れるぞ！」

正義が彰文を急かすので、それ以上の詳しい理由は聞けなかった。

「どうして……？ 明日お兄ちゃんがアメリカに行くのと関係……あるはずない、よね？」

嫌な予感の中したとわかったのは、片づけの作業をほぼ終えて、焼肉店に入った時だった。

そこで律花は衝撃の真相を知らされた。

「はあ？ 彰文くんが、明日からお兄ちゃんの代わり!?」

「そうだ。かわいい妹をひとり残していくのは心配だからな。変な男に引っかからないようにちゃんと守ってくれよ、彰文！」

「任せてくれ。つてことで、明日からよろしくね、りっちゃん」

「う、嘘でしょ……」

彰文は、正義がアメリカにいる間中、彼の代わりに律花を見守るため——いや、正確には見張るために隣に引っ越ししてきたのだという。つまり律花のお目付役ということだ。

自由を手に入れられると思っていたのに、正義はちゃっかり自分の代わりを用意していた。

悠々と肉をひっくり返している彰文を愕然とした思いで見ていると、彼はそれに気づいてにっこりと微笑んだ。

「はい、カルビ焼けたよ。これ食べたかった？ 取らないから安心して」

何を勘違いしたのか、彰文はいい塩梅に焼けた肉を律花の皿に載せた。

「ちよっと待て、それ俺がずっと狙ってたやつだぞ！」

すかさず正義が文句を言う。

「肉ならそこにも焼けてるのあるよ」

「そっちのほうがでかいだろ！」

どうでもいい言い合いを聞き流しながら、律花は肩を落とし、盛大なため息を吐いた。

「もう、最悪……」

翌日、今生の別れみたいな大袈裟なハグをされ、兄を見送った。正義を乗せて飛び立った飛行機が見えなくなった後、彰文の運転で帰路に着く。

「もう、恥ずかしいと思ったらないわよ。周りの人みんな見てた……」

「そうだね、よっぽどりっちゃんに離れたくなかったんだろうね」

正義は、別れ際に律花の名前を叫びながら抱きしめ、あとは頼むと彰文の肩を力強く叩いた。正義の大声に、何事かと周囲が注視する中、彰文はしれっと笑顔を返していた。恥ずかしいと感じていたのは、どうやら律花だけだったようだ。

「今更だけど、お兄ちゃんがばかなこと頼んでごめんね。引っ越しまでさせちゃって。断つてくれてもよかったのに」

むしろ断つてほしかった。彰文は昔から正義の我儘に寛大過ぎると思う。

けれど彰文は楽しそうに笑うだけだった。

「断る気なんてなかったよ。それに、断ったらアイツ、仕事辞めそうな勢いだったからね」

「嘘でしょ……もう本当にどうしようもないわね！」

呆れて脱力してしまう。律花は助手席のシートにぐったりと体を預け、天を仰いだ。

「お兄ちゃんは何頼んだかは知らないけど、私は大丈夫だから、ほっといていいからね」

「そうはいかないよ。せっかく引っ越してきたのに。俺は俺で代役をきっちりこなすつもりでいるよ。何かあったら遠慮せず頼って」

にこやかに、けれどきつぱりと断言される。

「代役って……そんなの必要ないんだってば。私もう子供じゃないんだよ？ それに、こんなことされると困るの」

「どうして？」

「そ、それは……」

その理由は他でもない。合コンや飲み会、未来の恋人とのデートの邪魔になるからだ。けれどそんなこと正直には言えない。言えばきつと正義に言いつけられる。

「ど、とにかく、代役なんてしなくていいの！ 彰文くんは彰文くんの生活を第一に考えて！」

「りっちゃんの兄代わりも、俺の生活の一部だよ？」

彰文はなかなか首を縦に振らない。

「そ、そういうわけにはいかないでしょ！ 残業で遅くなった私を会社まで迎えに行ったり、寝坊した私を車で送ったりしたいわけ!?」

「この車のナビにはりっちゃんの会社までの経路が三パターン登録されてるって聞いてるよ。正義

がない間は自由に使ってくれと言われているし、送迎は任せて！」

「土日はパシリよ？ 食材の買い出しとか……あと、そう！ ウィンドウショッピングとかにも連れ回すかも！」

「構わないよ。実はこういうの初めてだから、色々楽しみなんだ」

何を言ってもにこにこ嬉しそうにしている彰文を見て、律花ははたと気づいた。

そういえば彰文はひとりっ子だ。妹ができたと思つて楽しんでいるのかもしれない。

「あ、そうだ！ あとね、彰文くん——」

その後、色々なことを言つて抵抗してみたものの、全て笑顔でかわされた。そのうえ、起床時間や休日の過ごし方、仕事の内容などを聞かれ、うっかり答えてしまった。

ある程度は正義から聞いているらしく、もしかしたら自分よりも詳しいのではと思つてしまうほど熟知していたけれど。

「俺、いつでも正義になれると思わない？」

なんて、笑つて言う。完全に兄に代わつて見張る気満々のようだ。

「勘弁してよ、もう」

せっかく自由になれると思つたのに、また籠の中の鳥に逆戻りだなんて……

思い返せば、楽しかったのは彰文が引越してくる前の一ヶ月間だけだったかもしれない。デースポットを検索したり、かわいい服を着ている自分を想像してみたり。

ゆつくりと沈んでいく橙色の太陽を、律花は絶望的な思いで眺めていた。

2

一番幸せな時間は、誰にも邪魔をされずに素敵な夢を見ている時。

夢の中で律花は、いつか出会う素敵な男性と手を繋いで歩いていた。顔はわからない。だつてまだ出会っていないのだから。

「しあわせ……」

彼の肩に頭を寄せると、慈しむように頭を撫でてくれる。

やっぱり彼氏つて最高！

けれど、そんな幸せな時間を邪魔するかのようには、どこか遠くのほうから目覚ましのアラームが聞こえてくる。

「ああ、大変！ 朝が来たのね。私もう帰らなきゃいけないんだわ……」

切なげに呟くと、彼は律花の手を握り、行かないで、と首を振る。

律花はアラーム音を無視した。

「そうよね……やっと邪魔者がいなくなつたんだもんね！」

あとは、真実の愛のキスをするだけ。この夢が覚める前に……

彼を見つめ、つま先立ちで顔を近づけながらゆつくりと目を閉じかけた、ちょうどその時——

「……ちゃん、りっちゃん。起きて」

今度は誰かに名前を呼ばれた。そればかりかゆさゆさと体を揺すられて、律花の視界がぼやけ始める。夢の中の素敵な男性が消えていく。

「え、やだ嘘！ お願い待って、今いいところなのに！」
もう少しでファーストキスがっ!!

はっとして目を開けると、そこは見慣れた自分の部屋だった。夢から覚めてしまったのだ。
「おはようりっちゃん。起きた？」

呆然とする律花の目の前には、夢を強制終了させた張本人、彰文がいた。

赤と青の細いストライプのネクタイを白いワイシャツの胸ポケットに入れたままベッドに軽く腰かけ、楽しそうに律花の顔を覗き込んでいる。

「……せっかく、キスできそうだったのに」

「誰と？」

「目の前の人と！」

「俺？」

「ち、違うわよっ！」

もう！

律花は悔し紛れに枕に顔を埋めた。

「アラームが鳴りっぱなしで、全然止まらないから、寝坊するんじゃないかって心配してたんだ」

「……ちゃんと起きるつもりだったのよ」

とは言ったものの、律花はいつも兄に叩き起こされている。掛布団をはぎ取られてベッドの下に転がされて。

「俺のことが必要ないって言ったわりにはひとりで起きられないじゃないか。俺がいてよかったんじゃない？」

「うっ……べ、別に……ちようど起きようと思ってたし」

と言いつつ、しかし、彰文はどこか誇らしげだ。自分が早速、兄の代役を務めることができ嬉しいのだろう。

彼はくすりと笑うと立ち上がり、律花の頭をポンポンと撫でた。

「じゃあ、パン焼いてるから着替えたらおいで。二度寝はなしだよ？」

「わかってる……」

ドアが閉まり、部屋にひとり残される。

ため息を吐くと、律花はゆっくりと起き上がり、パジャマを脱ぎ捨てた。クローゼットにかけてあった服を手にとってハンガーから外し、ふと気づく。

「……あれ？」

そういえば、どうして律花の部屋に彰文がいて、当然のように起こしてくれたのだろうか。

彼の住まいは壁一枚隔てた隣の部屋のはずだ。

「えっ、な、何でっ!？」

律花は自室のドアを力いっぱい開けると、冷蔵庫の中を覗き込んでいる彰文に大股で近づいた。

「ちよっと彰文くん！」

「どうしたの、りつちゃ——」

「何で私の家にいるの！」

彰文は律花を振り返り、驚いた様子で目を見開いた。腰に手を当てて怒りを爆発させている律花をまじまじと見ている。

「彰文くんの家は隣でしょ！ どうやって入ったの？ 寝る前に戸締まりはちゃんと確認したのに！」

彰文は律花の剣幕に気圧されたのか、困ったような顔をした。そして、予想外の言葉を口にする。

「着替えの途中みたいだけど……」

「えっ」

そう言われて初めて、自分が、ブラジャーとパンティだけの姿だったことに気がついた。

「きゃーっ！」

両手で胸元を隠しながら叫ぶと同時に彰文が背中を向ける。

「み、み、見たわね！」

「見てないよ」

「——っ！ 嘘つき！」

叫ぶなり、律花はくるりと踵を返して部屋に駆け戻る。

「見られた……もう嫌！ っていうか何でいるの！」

就寝前に鍵は絶対かけたはず。

ならば、寝ぼけて迎え入れてしまったのだろうか。混乱したまましばらくドアの前でうずくまっていると、コンコン、とドアをノックされた。

「りつちゃん？ また寝てないよね？ 早く準備しないと遅刻するよ。もちろん車で送ってもいいけど」

遅刻、と聞いて急いで立ち上がる。枕元の目覚まし時計を見て、もたもたしている時間はないと気づいた。

「やばい、急がないと」

服を着てリビングに戻ると、彰文は優雅にトーストにバターを塗っていた。

「パン焼けたよ」

「あ、ありがとう……じゃなくって、彰文くん何でいるの？ 何で普通にパン焼いてんの！ しかも……さっき見たでしょ？」

見ていないと言うほうが無理がある。疑いの目でじいっと睨むと、彼はにっこりと微笑んだ。

「大丈夫だよ」

何が大丈夫なのよ！

「そもそもどうやって入ったの？」

「どうって、玄関から普通にだけど」

「か、鍵は？」

すると彰文はポケットから見覚えのあるキーホルダーの付いた鍵を出して見せた。

「それ……お兄ちゃん!? 返して!」

律花が手を伸ばすと、彰文はひよいと持ち上げる。

「ダメ。返せない」

「どうしてよ!」

「これはりっちゃんじゃなくて正義から借りたものだから。それに、この鍵がなかったら、俺はりっちゃんを起こしてあげられなくなる」

「うっ……」

それは困る。律花は手を伸ばしたまま動きを止めた。

「で、でも……こんな使い方するのは間違ってると思う」

正義が預けた鍵は、律花が鍵を失くしたり、急病で動けなくなったりした時に使うべきものだ。起こしてくれたことには感謝している。けれど、女性の部屋に上がって、勝手に朝食を用意して起きてくるのを待ってるなんて。

それに、部屋には見られたくないものがたくさんある。いくら旧知の彰文とはいえ、パジャマ姿を見られるのだって恥ずかしい。

「間違ってるよ。正義からも毎朝起こすように頼まれてるし。俺は任務を全うしただけ」

「……はあ? そうなの!?!」

あのばか兄貴! いくら親友だからって、何でこんな恥ずかしいことまで頼んでるのよ!

予想外のことに頭が痛くなり、律花は思わず額を押さえた。

そんな律花を見て、彰文はコーヒーを一口飲んでから口を開く。

「わかった……じゃありっちゃんの意見を尊重しよう。好きなほうを選んで。俺が朝食を用意して起こしに行くまでゆっくり寝てるのと、寝坊して、毎朝俺に車で送ってもらうのと、どっちがいい?」

「……どんな二択よ」

けれど、本当にその二択になりそうだと。律花は眉間に皺しわを寄せて口を嚙つかんだ。

「俺は正義よりも優しく起こすよ?」

彰文は律花の顔をじつと見つめる。律花が頷くのを待っているようだった。

「でも、やっぱり……」

「そうだと、時計見て。時間大丈夫?」

「げっ、大丈夫じゃない!」

律花は急いで洗面所でヘアセットと化粧を終わらせると、立ったままトーストを口に押し込んだ。

「りっちゃん、お行儀が悪いよ」

「ごめん、でも本気で遅刻しそうだから今日だけ許して——ごちそうさま!」

最後にコーヒーを流し込み、大慌てで玄関へ急ぐ。

「行ってらっしゃい。戸締まりはしておくから。あとこれ、冷蔵庫に入ってたけど持っていくんだろっ?」

「あ、お弁当! すっかり忘れてた!」

朝起きられない律花は、夜のうちに翌日のお弁当を仕込んでいる。中身は夕飯の残りや冷蔵庫にある半端な食材などだ。

「じゃあ、行ってきます！」

玄関先で彰文からお弁当箱を受け取り、急ぎ足で駅に向かう。いつもの電車で滑り込んでほっとした途端、律花はふと気づいた。

「……あれ、何か忘れてない？」

結局、鍵のことはうやむやのまままで終わってしまったのだった。

とある商社の経理部に所属する律花は、月末が繁忙期だ。この日も朝から伝票や未精算の領収証の処理に追われ、数字だらけの書類に目を回しかけたところでお昼休憩を迎えた。

「はあ、肩凝った……」

自動販売機でお茶を買い、重い足取りで食堂へ向かう。いつものテーブル席でお弁当を広げていると、前の席の椅子が引かれた。

「律花、おつかれー」

顔を上げると、同期入社ふくみねゆなの藤峰由奈だった。

管理部で事務をしている彼女とは何かと気が合い、入社当時からお昼を食堂で一緒に食べている。

「楽しいひとり暮らしはどう？ 満喫してる？」

その問いに、律花は嘆息して答える。

「……実は、一昨日、お兄ちゃんの友達ともだちが隣の空き部屋に引っ越してきたの。代わりに私を見張るために」

正義に言わせると、守るため、らしいけれど。

今日までのことを掻い摘まんで話して聞かせると、由奈は心底呆れた様子で苦笑いした。

「ここまでくるとお兄さんのシスコンも病的だね。笑える」

「ちよつと！ 落ち込んでる友達に、もつと他に言うことあるでしょ？」

恨みがましく見ると、由奈は声を上げて笑った。

彼女には入社した時から色々いろいろと相談していたため、律花の家庭の事情——主に兄の事情をよく知っている。正義がアメリカへ行くこと決まった時も、真っ先に由奈に話した。

「普通、親友にそんなこと頼む？ ばかでしょ。ばか兄すぎるでしょ！ それにね、その人——彰文くんっていうんだけど、優しいし頼りになるし常識人だから、お兄ちゃんがいた時よりは断然マシだと思ってただけだね……」

そこで律花は言葉を切った。朝のことを思い出して額を押さえる。

「なにに？ 何かあった？」

由奈はコンビニで買ってきたおにぎりの袋を開けながら、興味津々で続きを促した。

「……合鍵持ってる、寝坊した私を起こしてくれたの。お兄ちゃんが頼んだのよ。ありえないでしょ！ 友達にこんなことまで頼む!? 引き受けるほうも問題だけどー！」

「まあまあ、遅刻しなくてよかったじゃない」

「それは、そうなんだけどさあ」

下着姿を見られたことは黙っておくことにした。恥ずかしすぎて口にも出せない。

それから他愛もない話を続けて休憩を終えると、律花は散漫になりそうな意識をどうにか集中させて午後の業務に励んだ。その甲斐あってか、二時間ほどの残業で今月の業務を無事終わらせることができた。

「もう八時になるのか、腹減ったな。どっか寄ってくか？」

「もちろん主任の奢りですよねー？」

戸締まり後、経理部の何人かでエレベーターに乗り込みながら、そんな話で盛り上がる。

「片倉はどうする？」

「あ、今日は私も——」

「片倉さんはダメですよ」

言いかけたところで、律花の先輩、北山きたやまが口を挟む。

「今日は車の前で遅いって文句言いながら待ってる、に缶コーヒー一本！」

「じゃあ俺、一階のエントランスで無言で仁王立ち、に生ビール一杯で！」

すかさず主任も口を挟んだ。

「もう！ 賭けの対象にしないでください！ 兄はもう迎えにきません。アメリカに行ったんです！ なので私もお飯に連れてってください！」

残業後に出現する正義の存在は、すでに経理部に知れ渡っている。

いや、経理部内にとどまらず、他部署でも正義は有名で、律花の「怖い彼氏」だと噂になっていると、由奈から聞いた。

つまり、周囲から彼氏がいると思われる律花にとって、社内恋愛は絶望的だということ。

支店から異動してきたばかりの桜井ならば正義のことを知らないし、と期待していたけれど、あの一件以来、彼は律花に寄りつかなくなってしまった。

「えー、つまんないの。今日もカッコイイお兄さんが見られると思って、残業頑張ったのに」

「お前のモチベーションはそれだけかっ！」

主任と先輩の漫才のような掛け合いに、どつと笑いが起きた。

そして、みんなが連れ立ってエレベーターホールから移動していた時。

「あれ、でもいつもの車が止まっているよ？ お兄さんのだよね？」

「いや、そんなはずは……ええっ！」

見覚えのある黒のSUV車は確かに正義のものだった。先週アメリカに行った兄がもう帰ってきてしまったのだろうか。律花は焦りながら自動ドアを抜け外に出て、急いで車に駆け寄る。

「お疲れ様、りっちゃん」

律花を見つけて運転席から出てきたのは、正義ではなく彰文だった。のほほんと笑いながら手を振っている。

そういえば正義は、車を自由に使っていると彰文に言っていたっけ。

でも、だからといって——

「な、何でいるの？」

「迎えに来たんだよ」

ここにいる時点でそれはわかっている。けれど律花は頼んだ覚えなんてない。

「何で迎えに来てるの！ 勝手に来られても困る。それに……」

律花は遠巻きにこちらの様子を窺っている経理部の人たちを振り返った。

「ごめんね。今日はこれからみんなとご飯に——」

「聞いてないからダメ」

「は!? ちょ、待つ——」

文句を言う前に、彰文は助手席のドアを開けて律花を押し込んだ。そして、主任や先輩たちにペこりと頭を下げてから運転席側に回り込む。

「さあ、行こうか。シートベルトして」

混乱しながらも、つい言われた通りになってしまう。彰文はそれを見届けると車を発進させた。

「あのね、彰文くん。本当に迎えに来なくてもいいんだよ。私、ちゃんとひとりで帰れるし」

「気にしないで。正義にも頼まれてることだから」

「でも、彰文くんだって仕事の都合とかあるでしょ？」

律花が食い下がると、彰文が思いついたように提案した。

「じゃあ、こうしない？ りっちゃんが残業した日は、一緒に外でご飯を食べるんだ」

「……はあ？」

「だからそのために迎えに行く。俺の仕事の都合とかは気にしないでいいよ。就業時間はあつてないようなものだから」

「で、でも——」

「何食べたい？」

畳み掛けるように問われ、律花は絶句する。

有無を言わせぬこの態度……につこりと微笑んではいるものの、その顔には、文句は一切聞かないと書いてある。

彰文はやはり正義の回し者なのだと、律花は改めて思い知った。

「……………美味しいグラタンがあるお店。それ以外は嫌」

頬を膨らませて半ばヤケクソでそう言うと、彰文は左方向にウインカーを出した。

「かしこまりました、マイレディ」

迷わず車を進めているところから、店に心当たりがあるらしい。もつと無理難題を言えばよかつたと思いつながらちらりと彰文を見ると、何が楽しいのかにこにこしている。

着いた先は、こぢんまりとした一軒家風のレストランだった。『オープン』と書かれた年季の入ったプレートが、ドアにぶらさがっている。店に入ると窓側の席に案内された。十席前後の小さな店だ。

メニューを開くと、ハンバーグやステーキ、グラタンなどの写真が載っている。特にグラタンは見るからに美味しそうだ。

注文を終えると、彰文はネクタイを緩め、シャツの第一ボタンを外した。それをじっと見つめながら、律花は口を開く。

「彰文くんってどんな仕事してるの？ お兄ちゃんも不思議だったけど、彰文くんもそう」

律花の都合に合わせて迎えに来れる仕事なんて、一体どんなものなのかと疑問に思ったのだ。すると彰文は、なぜだか嬉しそうに体を乗り出した。

「俺の仕事は、パソコンでプログラムを組み立てること。会社に席はあるけど、パソコン一台あればとらあえずなんとかなるから、家でも仕事ができるんだ」

「……そ、そうなんだ」

時間の縛りがない仕事をしている彰文は、その気になればいつでも律花を迎えに来ることができらしい。やっぱり彰文の監視からは逃れられないのか……律花は肩を落として息を吐いた。

「俺に興味持ってくれたの？」

「え、何で？」

首を傾げると、彼は一瞬目を見開いた後、眉根を寄せたまま微笑んだ。

しばらくして、熱々のグラタンが運ばれてきた。少し焦げたチーズの香ばしいにおいが律花の食欲をそそる。

「わあ、美味しそう。いただきます！」

ざくり、とフォークで表面のチーズに穴を開ける。隠し味に香草を使っているのか、ほんのりとハーブの香りがした。

律花は夢中になつてグラタンを口に運んだ。トロトロのホワイトソースに絡むマカロニは律花好みのアルデンテ。まさに絶品だった。

「こんなの初めて食べた！ すごく美味しい！」

「気に入ってくれたのなら、俺も嬉しいな」

顔を上げると、彰文は自分のことのように嬉しそうにしていた。

昔、彰文に勉強を教えてもらつて答えがわかった時にも、彼はこんな風に微笑んでいた。それを思い出し、律花もつられて笑う。

彰文と一緒にいると、なぜだか穏やかで優しい気持ちになる。彼の持つ独特の空気がそうさせるのかもしれない。

先程までの不満も忘れ、律花はグラタンを平らげた。

「美味しかった！ 満足！」

そんな律花を見て、彰文はおすすめだというフルーツシャーベットを追加注文してくれた。

「この味は気に入った？」

「うん！ 家で再現したいくらい」

「じゃあ次来た時はハンバーグセットにしようか。これも気に入ると思うよ」
それを聞いて、先程見た写真を思い出す。

「わあ、楽しみ！」

次に来た時は絶対ハンバーグにしよう。いつ食べられるのだろうか。待ち遠しいな……と考えて、

はつとする。

元々は経理部のみんなのご飯を食べに行くはずだったのに、気づけば彰文とここにいる。いつの間にか、彼のペースに乗せられているのだ。

今も、次に一緒にご飯を食べる約束を自然にしていた。

彰文の手の平で踊らされているような気がするの、考えすぎ？

けれど――

「わあ、美味しい！ このシャーベット美味すぎる！」

律花の関心は、また食べ物のほうへ移ってしまった。

彰文が引越してきて数日が経った。

自力で起きられない律花は、結局、毎日彰文に起こされている。そんな自分を不甲斐ない思いながらも、彼を拒絶することができず、それどころか受け入れ始めてしまっていた。

「律花っ、聞いたよ！」

食堂でいつものようにお弁当を広げていると、コンビニから戻ってきた由奈がにやにやと笑いながらやって来た。

「男変えたんだって？ ワイルドな男前からからモデル風のイケメン！」

「はあ？ 何よそれ……」

意味がわからず首を傾げると、由奈は笑いを堪えながら話してくれた。

どうやら先日、彰文が会社まで迎えに来たせいで、社内では律花が男を変えたと噂になっているらしい。

「う、嘘でしょ！ 違うから！ それ彰文くんだから！ ていうか、私、周りの人にどんな風に思われているわけ!? ねえ由奈、お願いだからちゃんと誤解だと言っておいて！」

「目撃者も多かったし、無理なんじゃない？」

「そんな……」

「大丈夫、聞かれたら訂正してるから。とは言っても、管理部内だけだけど」
これで、社内恋愛は完膚無きまでに不可能になってしまった。

「こう言っちゃなんだけど、律花って色々と残念だよね」

あまりのショックでテーブルに突っ伏している律花を見て、由奈が続ける。

「外見もかわいしいし、料理ができて雰囲気的にも守ってあげなくなる感じなのに……何でだろうね、確実に嫁ぎ遅れる気がする」

「い、嫁ぎ遅れ……そんな不吉なこと言わないでよ！」

律花が顔を青くすると、由奈はそうだ、と何か思いついたように身を乗り出した。

「いいこと考えた！ そのモデル風イケメンと付き合っちゃえばいいんじゃない？ もともとお兄さんの友達なら、問題ないと思うの」

「やだ、ちょっと待ってよ！」

由奈は本気でそう考えているらしく、目をきらきらと輝かせている。

そう、彼女は人の恋愛に口を出すのが好きなのだ。彼氏ができないと嘆く律花をしょっちゅう合コンに誘ってくれたりもする。それはそれでありがたいのだけど、少しばかり先走ってしまうことがあった。

「お兄さんは律花がどこの馬の骨ともわからない男と付き合うのが嫌なだけでしょ？ だったら最初からお兄さんも知ってる人の中から選ばないじゃない！ 幼馴染と結婚なんて素敵よ？」

「やめてよ、彰文くんは、そういう感情はないの。昔から知ってるんだよ？ 今更恋人になるなんて考えられないし」

「じゃあ今からでも考えてみれば？」

無理なものは無理、と律花はその提案を突っぱねた。

彰文と付き合う？ そんなの、考えたこともなければ思いつきもしなかった。だって彼は正義の親友で、律花にとっては兄のような存在なのだから。

確かに、彰文は優しいし甘やかしてくれる。一緒にいると安心する。けれど、それは家族に対する愛情のようなもので、きつと恋愛感情ではない——と思う。

「わかった。それが無理なら、また今度合コンやるから、律花もおいで」

律花の頑なな態度に、由奈が諦めたように呟いた。

「え、本当!? やった、行く！ 絶対行く！」

弁当箱を片づける手を止め、律花はがばりと顔を上げる。

由奈の密かな趣味は合コンの幹事をする事。去年何度か誘われて参加した合コンは、正義の乱

入で全て不発に終わってしまったけれど、邪魔者はもういない。心置きなく参加できる。

社内恋愛が絶望的になってしまった今、律花の頼みの綱は合コンくらいしかない。

「あ、でも……」

ふと脳裏によぎったのは彰文のことだった。律花が合コンに行くと言ったら正義のように邪魔をしてくれるかもしれない。

「彰文くんが……大丈夫かな」

由奈が、心配する律花の顔を覗き込んで言う。

「もしその彰文くんとやらが邪魔しそうだったら、私と女子会するとかなんとか言えばいいよ。前みたたく場をぶち壊されても困るし」

由奈が言っているのは正義が乱入した時のことだ。

「うっ、その節は申し訳ございませんでした……」

ともあれ、一年振りの合コンだ。気合い入れて準備をしなければ！

楽しみができた律花は、上機嫌で午後の仕事に取り組み、予定通り定時で退社した。

家の最寄り駅に着き、夕飯の食材を買おうと、駅前のスーパーに足を向ける。

「あ、彰文くん！」

スーパーの入口で彰文を見つけた。

「ああ。おかえり、りっちゃん」

彰文は足を止め、律花が来るのを待った。朝と同じスーツ姿。律花と同じく仕事帰りのようだ。

「ただいま。彰文くんも夕飯の買い物？」

「そうだよ。このスーパーは広くていいね」

「でしょ！ 私もよく来るの。しょっちゅう来るなら会員カード作っておくと便利よ」

二人して買い物カゴを持ち、店内を並んで歩く。

「知ってる？ 水曜日は野菜の特売日で、金曜日が——って、彰文くん？」

先程まで隣にいたはずの彰文が消え、律花はキョロキョロと辺りを見回した。

すると彼は少し離れた惣菜、弁当コーナーにいた。

突然いなくなれるとひとりです話してるみたいで恥ずかしいのだけれども……

「もう、彰文くん！」

「どうしたの、りっちゃん」

彰文は律花のそんな気持ちにも気づかず不思議そうな顔をした。

ふと彼のカゴを見ると、すでに春巻きや唐揚げなどのお惣菜が入っている。

「巻き寿司と海鮮丼、どっちにしようか迷ってる」

「そ、そうなの？ ……じゃなくて！ あのさ、彰文くん。もしかしていつもこういうの食べてる？」

「うん、美味いよ？」

「自炊はしないの？」

自炊、と聞いて彰文は無言で苦笑いをする。

「……あ、パンなら焼けるよ？」

「そんなの自炊のうちに入らないから！」

こんなところまで正義と似ている。兄も律花と一緒に住むまではコンビニ弁当が主食だったらしい。

「もうっ！」

律花は彰文のカゴに入っている惣菜を棚に戻した。そして彰文の腕を引き、彼が持っていたカゴを店の入口に返して、先程までいた野菜コーナーに戻る。

「あの、りっちゃん？」

「私が作るから！ いつもお弁当なんてダメ！ たまに手抜きするくらいならいいけど毎日はダメだよ！」

きよんとする彰文に、律花は畳み掛けるように続ける。

「好き嫌いはある？」

「ないけど」

「わかった。じゃあ……」

律花は水曜日限定の特価品になっていたピーマンを一袋掴んだ。

「肉詰めかチンジャオロース、どっちがいい？」

彰文を振り返ると、ピーマンを見つめながら嫌な顔をしている。

「ひよっとしてピーマン嫌い？」

「いや……苦手なだけ」

しばらくの沈黙の後、彰文は小さな声で言った。

「それを嫌いって言うんじゃない」

「別に嫌いじゃないよ。苦い野菜は得意じゃないけど、食べられないことはないし……」

歯切れの悪い言い方が、まるで子供の言い訳のように聞こえて、律花は思わず嘔き出してしまった。大人だと思っていた彰文が、まさかピーマン嫌いだったなんて！

「だからね、りっちゃん——」

「ごめん、ごめん……ふふっ」

笑いながら目元に浮かんだ涙を拭く。彰文はバツが悪そうに律花から視線を逸らした。

「……りっちゃんだって今まで気づかなかつただろう？」

「それもそうね。あ、じゃあ、今日はオムライスにしようか。バターライスとデミグラスソースの。これは好きでしょ？」

「……よく覚えてたね」

「当たり前じゃない」

大学生だった彰文が遊びに来た時に、律花が夕飯を作ったことがあった。

冷蔵庫の残り物と相談して作ったオムライスだったけれど、どうやら彰文のお気に入りの一品になったらしい。あれから何度かリクエストされて作ってあげた。

おかげで今では律花の得意料理のひとつになっている。

「いつも美味しそうに平らげてくれたし、ちゃんと覚えてるよ」

「あの味は忘れられなかったなあ。また食べられるなんて、すごい嬉しい」

スーパードが必要な食料を買い揃えると、二人は並んでマンションのほうへ歩き始めた。

「お兄ちゃんも、私と一緒に住むまではコンビニ弁当が主食だったのよ。どうして男の人って料理しないのかしらね」

「俺も正義もしようと思えばするよ」

「じゃあどうしようと思わないの？」

「りっちゃんの手料理が食べたいから、かな？」

彰文は笑顔で律花を見下ろしていた。その表情からは、本気で言っているのか冗談なのか読み取れない。

「……何よそれ。意味わかんない」

角を曲がると夕日が差し込み、律花は眩しくて目を細めた。

「言葉通りの意味だよ」

律花は彰文を見上げたが、彼の表情は光に邪魔されて見えなかった。

「すごい……本物だ」

律花が作ったオムライスを前にして、彰文は感嘆の声を上げた。

「そんなに喜ぶもの？ ただのオムライスじゃない」

「ただの、じゃないよ。りっちゃんが俺に作ってくれた……特別なオムライスだ」

食べるのがもつたいたい、なんて言う彰文に苦笑いしながら、律花は付け合わせのサラダとコーンスープをテーブルに並べる。

「でも冷める前に食べちゃってよね。後でお代わりでもして」

「じゃあ、遠慮なくいただきますー！」

パン、と両手を合わせたかと思うと、彰文は大口を開けてオムライスを食べ始めた。そして、食べながら何度も「すごく美味しい」とか「いつも食べてる正義が羨ましい」といった言葉を口にしていた。彰文の喜びようが、まるで好物を食べている子供みたいで、律花はくすぐすと笑いを漏らす。

当然だけど、褒められれば嬉しい。

正義なんて、いくら料理を作っても、「美味しい」と言ってくれたことなんか一度もなかった。料理が得意だと自負していた律花も、さすがに自信を失いかけていたところだった。

「本当に、今まで食べたオムライスの中で、りっちゃんのが一番だよ」

「も、もうわかったから、そこまで言わなくていいってば……」

面と向かって褒められることに慣れていない律花の頬がじわじわと熱くなる。彰文からの尊敬の眼差しがくすぐつたくて、どうしても視線を合わせられない。

「あ、えっと……お代わり作ってようかな。あとどれくらいいる？」

彰文のお皿のオムライスが残り少なくなったのを見て、律花は食事の途中で席を立つ。彰文は食べ終わってからでも構わないと言ったけれど、すぐに作ってあげたかった。

褒められて嬉しくなった律花は、彰文にもっと喜んでほしいと思ったのだ。

言葉に出して言えないことは行動で示す——律花なりの照れ隠し。

「本当にいいの？ 俺は後でも平気だよ」

「いいの、私の手料理美味しいって言ってくれる人を待たせるわけにはいかないから」

「……ありがとう、りっちゃん」

彰文の屈託のない笑顔を見て、律花は頬を緩ませた。

「ごちそうさまでした。すごく美味しかったよ」

「いえいえ、お粗末様でした」

出した料理を残さず平らげてくれた彰文に満足した律花は、空になった食器を重ねながら言う。

「ねえ、よかったら明日も食べに来る？」

「いいの？」

「一人分作るのも二人分作るのもたいして変わりはないから。それにコンビ二弁当ばかりじゃ栄養偏^{かたよ}つちゃうでしょ。なんだったら毎日作ってもいいし……」

「それは、すごく嬉しいんだけど……毎日なんて、甘えちゃってもいいのかな？」

「いいわよ。それに、食費はきっちりいただくからそんなに気にしないで」

むしろ、一人分だけ作るよりもそっちのほうが助かるのだ。肉や野菜を買っても一回に使う分量なんて半分がいいところ。お弁当の具材に回しても余るし、数日もすればいたんでしまう。

「いない日は早めに連絡してちょうだいね」

「ありえないよ。絶対毎日食べる。食事の時間に遅れたとしても食べるから」

喜びを声に滲ませて言う彰文を見て、律花は口元を押さえて笑った。

「ふふ、わかった。じゃあ明日からね」

律花が使い終わった食器を下げようと立ち上がると、彰文がそれを制止する。

「待って、りっちゃん——」

そして彼は、食事のお礼に、と言つて食器を洗うと申し出てくれた。いつもやっていることだから、と断ったけれど、彰文はシャツの袖をまくり上げながら律花よりも先に流し台に立ち、スポンジを手に場所を占領してしまった。

「仕事して帰ってきて、料理までしたんだから、今日はもう座つてのんびりしてて？」

やんわりと諭され、律花はお言葉に甘えてソファでドラマを見ることにした。

これが正義だったら……ごちそうさまも言わず、食べ終わった食器をそのままにしてソファに寝転がり、お笑い番組を見始めるだろう。そして食器を洗っている最中の律花に、冷蔵庫から缶ビールを持ってこい、なんて命令するのだ。

「親友なのに、こうも違うなんて……」

律花はちらりとキッチンに視線を移した。対面式のキッチンは、ガスコンロと流し台がリビングのほうを向いていて、彰文の様子がよく見える。

長身の彰文には流し台が低くて洗いづらそうだけれど、彼は楽しそうにお皿を水でゆすいでいた。

しばらくして律花の視線に気づくと、にっこり微笑む。

「何か飲む？ コーヒーでも淹れようか？ それとも紅茶がいい？」

「ええっ」

律花は驚いて目を睜る。

彰文のこの気遣い……正義と全然違う！ こっちのほうが断然いい！

どうして自分は、彼が隣に越してきたことに不安を覚えたのだろう。正義との生活なんかよりも今のほうが、何倍も、何十倍もいいに決まっている。

当初は嫌だと思っていたはずなのに、今はこの生活を快く受け入れている。朝はベッドから落とされることもなく優しく起こされて、夕食を作れば喜んでくれる。家事の手伝いも進んでしてくれるし、何よりいつも目の前には優しい笑顔。

……これのどこに不満がある？

律花はすつと立ち上がり、ダイニングテーブルを通り越してキッチンに向かった。不思議そうな顔をする彰文に笑いかけて、彼のうしろに回り込む。

「自分でするから平気よ。彰文くんも飲む？ 紅茶でいい？」

壁側の食器棚からカップとティーバッグの缶を取り出す。すれ違った時に背中が当たり、ごめんと軽く詫びた。

体格のいい彰文と二人並んで立つには少しばかり狭いキッチンで、流れてくるCM曲に合わせて鼻歌を歌いながら二つのカップにお湯を注いでティーバッグを浮かせた。

「そうだ、正義にちゃんとメール返信してる？」
「え、あー……うん、忘れてた」

彰文からの問いに、楽しい気分がしぼんでいくのを感じながら、律花は角砂糖の小瓶とカップをトレイに載せる。

どうしてこんな時に思い出させるの……

「朝起きるとメールが来てるんだけど、時間なくて返信できなくて。後で送ろうとは思っただけど、そうこうしてるうちに忘れちゃうの」

一番の原因は送るつもりがないことなのだけれど、それは黙っておいた。

「……だろうと思った。心配してるから送ってあげて」

彰文は困ったように眉を顰めて振り返る。きつと彼のほうにメールがたんまりと送られているのだろう。

それはそれで悪いと思ったので、律花は素直に頷いた。

「寝る前に送ることにする。紅茶、テーブルに持っていくね」

逃げるようにキッチンを出てソファアに座った。テレビは週間天気予報を放送している。

「やった、土曜日晴れになってる！」

「どこか行くの？」

「うん、買い物に行こうかと思って……」

そうだ、と律花はソファアに置かれていたファッション雑誌を手を取った。

服の好みは人それぞれだけれども、他の人の意見も聞きたいと常々思っていた。けれど正義に聞けば、どこに着ていくのかと根掘り葉掘り聞かれることはわかっていたので、聞くに聞けなかったのだ。

彰文なら、きつと男性目線の鋭いアドバイスをくれるだろう。

そのアドバイスを参考に、今度開催される合コンに着ていく服を調達しよう。

「あのね、彰文くん。ちよつと聞きたいことがあるんだけどいい？」

「うん、何かな？」

洗い物を終えた彰文は、手を拭きながら続きを促した。

律花は膝の上に置いた雑誌をめくり特集ページを探す。彰文は律花の背後に立ち、うしろから覗き込むように腰を屈めた。

「あ、あった……彰文くんはさ、例えばミニスカートとショートパンツだったら、どっちが好み？」

これ、と見開きページを見せる。そこには『オトコ受け抜群！ ミニスカート対ショートパンツ対決。勝つのはアナタ！』と書いてあった。かわいらしいものからセクシーなもので、たくさん写真が載っている。

ちなみに次のページには、それぞれのオススメポイントが細かく記載されている。例えばスカートは男性が脱がせやすいだとか、ショートパンツはお尻のかたちがわかるから誘うのにいい、といった過激なことまで書いてある。もちろんそんなページを彰文に見せるつもりはないけれど。

「……俺の、好み？」